

〈外地〉文学への射程

旧植民地、および旧占領地からなる〈外地〉のイメージは、文学をはじめ、新聞や雑誌、或いは観光案内などといったさまざまなメディアにおいて形成された。また方、こうした〈外地〉イメージの形成は、文化的・政治的中心地としての〈内地〉を前景化しており、この中心／周縁のイメージを往復するところに日本の植民地体制の〈強度〉があった。本企画では、「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」日本文化研究班・木村一信研究室の5年間の活動のまとめとして、〈外地〉文学研究の可能性について考えていきたい。目下、事業推進担当者である木村一信を中心に、論集『〈外地〉文学への射程』が刊行予定であるが、本企画もまた〈外地〉文学研究における方法論上の「射程」について討論するものである。

立命館大学アート・リサーチセンターを拠点として収集・データベース化を進めてきた資料を用い、そこから日本統治期朝鮮における日本／朝鮮のイメージ化について考える。「京城日報」は主に在朝日本人を読者として想定していた新聞だが、記事にはその彼らにどのような中間的位置を担わせるべきかという戸惑いも見えかくれしている。また、朝鮮近代文学の日本語訳の問題についても考えたい。当時、テクストの翻訳をめぐるどのような力学が作用していたかを知ること、朝鮮というイメージの恣意性が見えてくるだろう。



司会：木村一信（立命館大学 名誉教授）

■研究発表（発表30分、質疑15分）

「〈外地〉文学研究の新たな方向性 — デジタル・ヒューマニティーズを経由して —」

講師：楠井清文（立命館大学 非常勤講師） コメントーター：三上聡太（立命館大学大学院 文学研究科D3）

「近代初期朝鮮半島の日本語文学から見る朝鮮文学の日語訳」

講師：鄭炳浩（高麗大学校 教授） コメントーター：土屋忍（武蔵野大学 准教授）

「旅行誌『観光東亜』に見る「満州」」

講師：池内輝雄（國學院大学 教授） コメントーター：竹松良明（大阪学院短期大学 教授）

2012年1月21日[土] 14:00-17:30

立命館大学 国際平和ミュージアム 2F 会議室

入場無料・予約不要

主催 | 文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）

企画 | 日本文化研究班・木村一信研究室

会場
アクセス | 立命館大学国際平和ミュージアム 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899
<http://www.ritsumeikai.ac.jp/mng/er/wp-museum/info/access.html>

問い合わせ先 | 立命館大学アート・リサーチセンター事務局 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
TEL 075-466-3411（平日9時～17時30分）担当：三上 arc-jimu@arc.ritsumeikai.ac.jp

